

山内清男の細別型式について

戸田哲也

縄文土器の型式を提唱し、設定されたのは山内清男博士（以下博士省略）の最大の業績として日本考古学の研究者誰しもが認めるところであろう。

今から89年前となる、昭和7年（1932）の日本遠古之文化「縄紋土器文化の真相」ドルメン1-4に於いて、縄文土器は一系統の土器であり、樺太千島から琉球までに亘ることを明言される。そして縄文土器は「この年代によっても地方によっても截然と分ち得ない一体の土器が縄紋土器なのである」、そのため「地方差、年代差を示す年代考古学上の単位—我々が型式と云って居る—を制定し、これを地方的年代的に編成して縄紋土器の型式網を作ろう」という宣言がなされたのである。山内清男30歳、同誌において少壮の篤学者と紹介されているが、山内は強く、迷いのない確固たる方針に立脚していたのである。

そしてすでにこの時点で縄文土器の実態について「土器型式の変遷は在来の土器の伝統及び多少の変化と、新しく他地方から来た影響との二者から成立することが多かった」とその特徴を正確に捉えている。大正末から昭和初期の約10年間のあいだに関東・東北の大量な土器を掘り、観察し、加えて昭和5年京大資料の徹底観察から西日本の土器を押さえたことも含めた結論であった。

続いて昭和10年（1935）、ドルメン4-6「縄紋式文化」では“縄紋土器型式の調査過程の概要”として丁寧な解説がなされた。今日において改めて確認すべきテキストとなるものとして以下に取り上げる。

テキストA：型式の認定について

土器によって年代の階段を作るには先づ、一遺跡、一地点又は一地点に於ける異った遺物層から発掘された土器を一つの資料として、甚だ多数の資料を観察し、吟味することが必要である。この場合資料を求める範囲は広くない範囲から選ぶべきである。余り広い地域を取り扱うと地方差が入ってくる恐れがあるからである。

まさしく山内の経験から言うが如く、型式認定の最初の段階としては同地域の、比較に耐える数遺跡の吟味が必要とされよう。1遺跡1型式は認められないのである。

細別型式の認定レベルとしての範囲（分布域）は、大洞式のようにいくつかの県にまたがる分布を山内は見据えていたが、今日の資料が充実した縄文中期関東南部の先行研究から、例えば連弧文土器の中心分布は東京—神奈川（40km×50km）程度であり、中峠式の中心分布は千葉—茨城（40km×50km）程度、新戸・原山型土器は埼玉・東京・神奈川の西部と山梨東部を加えた程度（30km×60km）という状況が明らかとなっている。このように山内細別型式の細分（追記1参照）は40km×50km前後の分布域を中規模型式の標準的あり方と見ることができる。

細別編年を進めている現状において、近隣に比較例が乏しい状況で、拙速に広域比較へと走るのは、山内が警告するように地方型式の枠を越えてしまう可能性が高く、並行型式関係も含めて混乱を生ずる場合がある。型式細分を行う上で自らの立ち位置を山内テキストに照らして考慮することが肝要であろう。

テキストB：型式の内容について

新しく出来た型式は一定の内容を持ち、一遺物層、一地点又は一遺跡から純粋にそればかりが出土、他の型式とは内容を異にし、遺物層、地点又は遺跡を異にして発見されることになるのである。これらの型式は即ち短時日に残された土器の一群を意味し、年代の変遷の一段階に相当する訳である。—中略—方々の地点、方々の遺跡の層位を集め、これを編輯して、全般に亘る年代順が出来るのである。

ここでテキストとは別にもう一つ、山内縄文土器型式論の中核となる「縄文土器型式の大別と細別」論文、先史考古学1-1、昭和12年(1937)からも一部を掲げる。

真に執るべき科学的手段は先ず個々の短い時代の文物(この場合はある文様特徴をもつ土器群と解せる一筆者注)を確認する。そしてそれらを層位又はその他の自然現象に応じて年代順に定める(独立した時間幅をもつことの確認—筆者注)。又はその欠を補うため文物の比較(類例となる土器群—筆者注)をして先後を推定する。—中略—連続する文化の区分は最も短時日である程、一挙一動まで明らかにされるであろう。縄文土器文化の最短期間の状態は縄文土器の型式区分を通じて知り得るのであるが、その区分が最も細くなる程、その変遷の詳細を明らかにし得るであろう。型式は益々細分され、究極まで推し進むべきである。—中略—調査は一国一郡の如き小区域に於いても行われ得るものであり—中略—年代的組織は先史考古学の根幹であって、これは年代の細別、研究地域の細別によって緻密となるのである。

上段に引用した「縄文土器型式の大別と細別」論文はこれまでの山内の土器型式に関する総括的文章となっており、附表として全国にわたる編年表が公開された。現代の私達にとって“型式は益々細分され究極まで推し進むべき”、“一国一郡の如き小区域に於いても行われ”のフレーズはまさにバイブルのような位置づけをもって受け入れられてきたのである。

話は飛ぶが、1967年4月、山内清男論文集の復刻版が発行され始め、ようやく当時大学生であった私達の世代が、日本遠古之文化、先史土器図譜、大別と細別論文等を学べる新たな研究段階へと進むことが出来た。この春の考古学協会で山内清男自らが日本遠古之文化を積み上げて販売していた姿が忘れられない。学生達のあいだには一まだ生きておられたとは一という驚きの声まで上がっていたのである。もちろん積み上げた復刻版は飛ぶように売れ、山内自ら柏屋印刷所を何度も往復したと聞く。おそらく当日参加者の大部分が買い求めたと思われるほどであった。そしてこの年の冬には先史土器図譜も復刻されたのである。

学史的にはまさしくこの時代以降、関東を中心とする開発による大規模調査が始まり、山内から直接学んだ山内第2世代から10年は離れた山内第3世代とも言える私達は、改めて山内の考えを原点から学ぶことが出来、さらに自ら発掘し、土器型式を考えられる時代状況となった。その結果、早速にも山内第2世代がまとめた代表作「日本の考古学Ⅱ」の細別型式に対して、山内型式論の基準を満たしていない型式、あるいは細分の可能性がある型式、並行関係の不明な型式等々に気付き始めたのである。山内第2世代の一部は山内細別型式について十分に学んでいなかったと言えよう。あえて述べるならば、大別と細別論文附表の(+)部分も加えて型式名が付された状態であり、山内に言わせれば「型式の予想」を示したにすぎず、これからが核心の細別研究となるものであった。

私達山内第3世代は発掘に学びながら層位を重視し、一括出土土器群、住居址の堆積層位と土器、住居の切り合い関係と土器、続出する類例土器群との比較、全点ドットによる検証などの新たな視点からの研究手法を駆使して型式の細分を開始する。特に開発の進行する首都圏において新しい土器研究の胎動によって、プレ加曾利E1式(中峠式)の提起、連弧文土器の細分と系統論、加曾利E式の細分(特に加曾利IV(4)式)、勝坂式・曾利式の細分等々、中期の遺構調査に伴う中期土器の細分に火が付いたのである。

しかしこの東京を中心とする新たな研究状況、そして山内の進める型式細別に対して突然、「いつまで編年をやるか」という爆弾発言が藤森栄一によって発せられた。藤森曰く「現在は関東・東北を先導に、大別にも細別にも、土器の形式編年^(ママ)はほとんど完備して、しかも、ほぼ全国各地にそれは応用されている。」そして「編年学は確かに行くところまで来たわけである」と続き、「掘りすぎた考古資料を正して、考古学資料として編成していくべき時期にきた」と結んでいる。考古学ジャーナル No. 35. 1969. 8。

これは山内型式論への第1～2世代の着陸アナウンスであり、山内第3世代はまさしく離陸した時であった。

山内はすぐに「「余り分け過ぎる」というブレーキは落伍者の車についていた」—「縄紋草創期の諸問題」MUSEUM 第22号. 1969. 11. と反応し、数年後佐原眞は同じ考古学ジャーナル誌上で「いつまで編年をやるか、と問われれば、考古学の続く限り、と答えよう。縦に横に編年表をますます充実させながら、考古学本来の目標をはたしてゆくのだ」と応答している。「1971年の考古学界の動向」考古学ジャーナル No. 74. 1972。

学史に残る象徴的なやり取りであるが、藤森の言は日本原始美術Ⅰの発刊—1964年、そして井戸尻・日本の考古学Ⅱの発刊—1965年を背景に語られたのであろう。編年研究上の大きな画期となる各著ではあったが、山内細別型式の基準に照らせば、日本の考古学Ⅱに見るようによく細別研究の目標が見え研究の入口に立った時に、それを停止せよという研究錯誤を起こしているのであった。この当時、藤森につながるある大学教師は、縄文土器編年の卒論は受け付けなかったとも聞いている。

なお戦後の土器型式の研究史については雑誌『縄文時代10号—縄文時代研究の100年』において「土器型式編年研究総論」として詳細を述べているので参照願いたい。

さて、少しコメントが長くなったが、「縄紋式文化」のテキストにもどる。

テキストC：細別型式について

今日では関東及び陸前では型式別が綿密に作られ、二十幾つかの型式が発見され、年代順も略々確かめられて居る。大概出揃ったと見てよい。今後新型式は多く出ないであろう。

ここで明らかにされた早期～晩期の5大別と1地域20幾つかの細別型式については2年後の“大別と細別”論文（正確には「大別論文」）の附表として公開されることとなる（次頁参照）。その附表を見ると山内の細別型式は、関東、陸前のみならず全国の主要型式の多くが含まれており、(+)型式を加えて全国105型式を数えることができる。なお注意される点として×マークはこの附表にのみ用いられ、以後示されることのない印であるが、注意すべき意味をもっており、このことは後述する。

しかし“大別と細別”の全国編年附表に続く編年表はついに正式には発表されることなく、わずかに“原始美術Ⅰ”巻末の“縄文土器型式の編年比較表”において助言を与え、草創期の分離をはたす。

今日の型式認識に関してテキストCの部分と附表のもつ大きな意味は2つあると考えられる。1つは附表(+)も加え105型式に及ぶ細別型式の存在を示し、他の学者の追従を許さない圧倒的な研究を知らしめたことにあり、“今後新型式は多く出ないであろう”との自信も示したのである。と同時に大切な点として山内の細別型式とは、この提示した全国編年105型式レベルを標準とすべきことを暗に主張していることにある。このことはこの2年後に「東北で約30型式、関東にも20型式余りの型式について研究方針又は到達すべき成績の予想を与えた」（筆者傍点—大別と細別論文）とする記述においても明らかである。

縄紋土器型式の大別と細別

	渡島	陸奥	陸前	関東	信濃	東海	畿内	吉備	九州
早期	住吉	(+)	槻木 1 " 2	三戸・田戸下 子母口・田戸上 茅山	曾根?× (+)	ひじ山 粕畑		黒島×	戦場ヶ谷×
前期	石川野× (+)	円筒土器 下層式 (4型式以上)	室浜 大木 1 " 2a, b " 3-5 " 6	蓮田 { 花積下 関山 式 黒浜 諸磯 a, b 十三坊台	(+) (+) (+) 踊場	銚ノ木×	国府北白川 1 大歳山	磯ノ森 里木 1	轟?
中期	(+) (+)	円筒上 a " b (+) (+)	大木 7a " 7b " 8a, b " 9, 10	五領台 阿玉台・勝坂 加曾利E " (新)	(+) (+) (+) (+)			里木 2	曾畑 阿高 出水 } ?
後期	青柳町× (+) (+) (+)	(+) (+) (+) (+)	(+) (+) (+) (+)	堀之内 加曾利B " 安行 1, 2	(+) (+) (+) (+)	西尾×	北白川 2 ×	津雲上層	御手洗 西平
晩期	(+)	亀ヶ岡式 { (+) (+) (+) (+)	大洞B " B-C " C1, 2 " A, A'	安行 2-3 " 3	(+) (+) (+) 佐野×	吉胡× " × 保美×	宮滝× 日下×竹ノ内×	津雲下層	御領

註記 1. この表は仮製のものであって、後日訂正増補する筈です。
 2. (+)印は相当する式があるが型式の名が付いて居ないもの。
 3. (×)印は型式名でなく、他地方の特定の型式と關聯する土器を出した遺跡名。

1 地方20～30細別型式という目安は“大別と細別”論文時点で固まったと言って良いであろう。その後30年を経た山内晩年の MUSEUM 誌上では「現在に至るまで各期の細別はますます進行した。一中略一各期の細別の数は細分の秘術を尽くしても十前後に止まって居る」と述べられ、これを各期 = 6大別で数えれば60型式前後が地域別の数となり、昭和10～12年と比べ倍増しているが、その後の細分の成果を取り入れた山内の細別型式観はここでほぼ結論と見ることが出来るであろう。そして筆者の言いたい点も、ここにある（追記2参照）。

しかしその場合、もう一つの問題として“型式は益々細分され、究極まで”というかけ声はどのように受け止めるかが問題となる。

その答えとしては細別型式空白地域に研究を進めることであり、関東・東北で行った範にのっとり一国一郡の小区域まで、細分の秘術を尽くすことにあると言えよう。“大別と細別”の附表での (+) マークは「相当する式があるが型式の名称が付いて居ないもの」であり、×マークは「型式名でなく、他地方の特定の型式と聯する土器を出した遺跡名」であり、まずこの両者が到達すべき（細別）予想の研究手がかりとして見る事ができるのである。ただし×マークについては、山内が将来起り得る型式認定の混乱を防ぐ意味での注意表現（具体的に言えば在地の細別型式を表す特徴的な文様手法をもつ土器群は何か、とする注意）であったはずが、山内第2世代の研究者から現在の研究者まで (+) と×マークを同様に扱い、結果として×マークのいくつかには問題を残しているのである。×マークはエックスではなく、バツマークでもあったのである。

今村啓爾はタテとヨコに組まれた編年網と型式について、棚入れ形の編年と呼ぶ。郵便局の地方別棚に郵便物をポイポイと入れる様を例えたのであろう。棚入れは前述した日本の考古学Ⅱの型式にその姿が多く見られ、×マーク型式とも一部通ずるところがある。一方、徐々に棚を充たしていく (+) マークをも研究せよ、との意味が含まれているであろう。前述した佐原真も「縦に横に編年表を充実させ…」と語る。

実は、テキストとした「縄紋式文化」の文末には、「以下縄紋文化の構造（横）を書く筈であった（筆者傍点）」との一文が付されている。構造（横）とは細別型式の分布域・小地域型式の分布域と型式細分の捉え方等を意味し

ていた筈であり、縄文土器研究の課題としてどうしても学びたかったところである。

最後に、上記をもとに山内の細別型式を筆者なりにまとめてみると、

- 1) 主体となる土器は在地の独自文様を示すもの
- 2) その分布域（範囲）が捉えられること
- 3) 層位学的な存続時間あるいは地点差の証明があること

という基本3点に加えて、

- 4) 他の細別型式との共伴あるいは並行関係の確認ができること、となる。

以上4項となり極めてシンプルではあるが、1項でも欠ければ細別型式とはならない。

また別途、山内の予想する細別型式数は1大別10型式が目安となっていることも改めて確認する必要があるだろう。

以上、縄文土器研究者にとってあたり前と思われることであるが、時代とともに山内の土器型式理論を整え、細別型式の捉え直しと、空白地域での等質な細分研究を進め、考古学的基礎研究としての役割を再生させなければならないと考えている。

追記1

細別と細分と言う用語の使い方について我々縄文土器研究者間ではあまり取り上げられることのないまま今日に至っている。山内は昭和初期から細別型式という表現を用い晩年まで貫徹している。したがって山内のいう土器型式の正しい表現は「細別型式」とすることは論を俟たない。

しかし時折、山内は「細分」を用いている。古くは日本遠古之文化で「近年自分の腹案では関東地方の土師器に少なくとも五型式の細分を認めており—補注39」と用い、大別と細別論文では有名な「型式は益々細分され」の表現があり、晩年のMUSEUM論文では「各期の細別の数は細分の秘術を尽くしても」と明確な文章を示された。「細分の秘術」で明らかのように、細分とは細別型式化への過程であり、型式を形作る手法といえよう。

追記2

山内清男のいう細別型式とは、「縄紋土器の文化の動態（日本遠古之文化より）」を語るための考古学上の単位でありまた年代学上の単位となるものである。それが短時日であるほど文化の変遷をこまかく語ることができ、そのため土器型式の細分をすすめることとなる。しかしそこで短時日の基準ともなる究極の細別型式を現実的に考えねばならない。前述したように山内の予測では1大別10型式という最終的目安が示されている。もちろん10型式という数については固定されるものではなく、実際に各期毎に多少の増減が認められるが、筆者（戸田）は縄文各期の編年研究を行ってきた経験から山内の目安は極めて現実的な学説として受けとめることができるのである。

究極の細別という山内の意図を取り違えた感のある、細分のための細分は一種の進化論的文様分類と言え、本来の細別研究とは異なるものである。山内の細別型式に関する予想を現実化するための目的的な細分作業が行われなければならない。

土器文様の変化は極めて漸移的であり、文様変化のどこを、どのように区分するか、そして並行型式との文様上の影響関係をどのように区分するか、という縦と横の型式関係を求めるためにはある程度の細分段階をくくり、前後との型式差を概念的かつ抽象化する作業が必要となるのである。以下いくつかの例をもとに細別と細分について説明したい。

1999年の縄文時代文化研究会による「縄文土器全国編年」は、全国の土器型式を並行関係でつなげる、いわゆる横の編年を求めたところに大きな特徴があり、そのためのいわゆる縦の編年は各大別10型式前後が自然体として導

き出されたのであった。各型式の内容整理が必要なところはあるが山内の予想する細別型式に接近するものといえる。しかしこの縄文研全国編年表は引用されることが極めて少ない。無視なのか無知なのか、いずれにせよそのプライオリティは堅持されねばならない。

2016年の称名寺貝塚シンポジウムでは、称名寺式土器について細別型式を求めるための細分研究史を背景として、石井寛により7段階に細分された称名寺式土器は、概括的に古・中・新段階にくくられて説明された（「称名寺貝塚と称名寺式土器」2016）。もとより各遺跡で見られる共伴と一括資料のあり方からもすでに古～新は用いられているところではあったが、改めて石井の3区分は細別型式の基準となるものとして捉えられ、関東後期の10数細別型式に数えることとなる。

また新地平編年と呼ばれるものがある。関東中期の土器を文様から極めてこまかい段階差として求めようとするものであり、13期に分類しさらに31の小期に分ける。この13期を細別時期と表現されているが山内の細別型式とはならない。それには型式学的まとまりと、層位と分布の証明が必要だからである。小期についてはなおさらその証明は困難なものとなろう。それでも何故31もの小期に分けようとしたのかは、西東京を中心とする住居址の時期区分と配置による実験的集落研究を目的とするための文様段階分類試案として理解できる。しかしその土器区分は山内の予想する細別型式とは全く異なるものであることは明らかであり、第何期と呼称するのもその表れである。記号での土器区分は、細別型式のどこに属するのかが全く不明となり、他地域型式との整合性を全く図ることができないのである。これをあたかも編年表の如く取り扱っている場合があるが、その用い方に対して筆者は強く反対しておきたい。

とはいえ一つの展望として新地平1～13期は、山内の各期10型式に近い数であり、細別型式作業のための素材として仮説的に取り組むことは必要であろう。

新地平グループの取り組みとは別に、詳細な文化論を語るための手段として細々分土器を武器とする今村啓爾の縄文前期の北陸系統と円筒下層系統土器の移動に見る実践的研究を挙げることができる。そしてこのような各個テーマにもとづく土器の細分、細々分の落ち着き先はあくまでも細別型式の中における時間差、とする共通理解のうえ山内の目的とする「**縄紋土器の文化の動態**」へと展開していくこととなるのである。

〈付記〉山内先生の思い出—成城大時代—

シンポジウム当日、レジュメ内容とは別に山内先生の思い出を披露させていただいた。個人的な感想も入っていますが、晩年の成城大学での先生の姿を記録に残しておくことも大切かと思ひ文章化しておくこととします。

山内先生に初めて接したのは昭和38年6月、私が高校1年の時で、多摩考古学研究会の山内先生記念講演会でした。縄文草創期の提唱と本ノ木調査の成果、そしてシベリアまで広がる先生の説の迫力は私の頭の中にすんなりと収まったのです（この講演会のテープ起こしと解説を加えた中島宏氏の報告がある—多摩考古第37・38号、2007・2008年）。

この年の秋に芹沢長介先生とお会いする機会があり、採集品の石槍胴部破片を持参し、講演会でおそわったばかりの知識で「これは植刃ではありませんか？」とお見せすると、「これは折れたものと思うよ」とさりと答えられました。本ノ木論争を知ったのはこの後のこととなります（この時代の思い出は玉川大学教育博物館考古資料展カタログ2017年に詳しい）。

やがて私は玉川大学に進み、昭和43年夏に高ヶ坂八幡平遺跡の敷石住居址調査に参加、その際縄文早期の住居址と遺物類が出土。当時入会していた下総考古学研究会の塚田光さんの紹介で山内先生のお宅を訪ね、遺物類について指導を受けたのです。先生は函館市住吉町・春日町遺跡の写真資料をもとに、ていねいに田戸上層式について教

えていただきました（多摩考古第10号1970年）。そしてこの指導を機会に時々来るようにとのお誘いをうけ、各地の発掘情報、採集遺物等をもって喜多見のお宅に通うこととなりました。

先生のお茶の飲み方は、私の時代には紅茶のティバックでした。お湯を足しながら3回以上飲みなさいと教えられ、先生の話が延々と続くのです。話の内容は飛々で、長時間のこともあり残念なことにほとんどおぼえていません。夕刻、おいとましようとする、もう少しいなさいと命令され、やがて奥様がサンドイッチを持ってこれそれを食べながら話が続くのでした。

翌昭和44年の6月頃、いつものように喜多見に行きますと、「成城大に新しく考古学も専攻できる大学院ができるので受験しなさい」と半命令調のお話があり、バタバタと10月には入試となりました。口答試問当日、先生は見違えるような三つ揃えのスーツを着こなされ、他の先生方の機先を制するように「私の専攻の受験生ですので私が質問します」と宣言。そして関東の縄文中期土器について説明を求められました。何と有難い質問かと心の中で思いながら無事終了。

夜半に帰宅すると夕刻に山内先生から直接電話があり、合格が伝えられたのこと（もちろん大学からの正式連絡以前となる）、全て先生のシナリオのもとに進行。翌日早速喜多見にうかがうと「君が最高得点だったので私も嬉しい（面目が立った）」と、私は頭の中が「……………」、有難く御礼を申しあげる。先生はすぐに続けて「明日以降研究室に通うように」との御下命。

10月から毎週土器資料観察のお手伝いが始まった。先生は縄紋草創期の諸問題を上梓し、次は縄文晩期の諸問題を予定されており、奥の遺物を順々に観察される。なるほどと改めて先生の仕掛が進むのを実感するのであった。

翌年（1970年）4月によくやく正式に入学。受講する講義について「この先生はOK、この先生はダメ」と指示される。後に画龍点睛1996で岡田淳子さんが触れられた講義の思い出と全く一致、終世変わらぬ先生の性格の一端を見る思いがする。

先生の講義は1対1の原書講読であったが、実際は先生が要旨をしゃべり数回で終わる。学部の卒論指導と講義も研究室で行い、その間に晩期末資料の観察と新たな出し入れを手伝う。来客も多く結構忙しく時間が過ぎる。

ある日、京大の梅原末治先生が来訪され、新しい院生ですと紹介される。梅原先生はあのメガネでしばし私を凝視、カッチンコッチンに固まった思い出となる。またある日、地方の教育委員会の方が来訪、先生は近くにいた私を呼び何点かの土器片を示し「これは何式？ 次にこれは？」と矢つぎ早に問われる。型式名を答えると満足そうにうなずいて「このように縄文の研究者は土器型式を知らなくてはならないのです」と、また「人類学者が人骨の部位を知ることと同じです」と説明される。

考古学研究室は、柳田文庫の建物の1階全てを専有し、広い研究室は中央に大きなテーブルがあり、遺物整理も少人数の講義も小さな黒板を使いここで行います（後の佐藤先生も同じ）。この部屋の奥には大量の文献書庫と10万点を超える写真資料の保管スペースがあり、さらにその奥は遺物収蔵スペースとなり、仙台、東大以来の遺物資料が積み上げられ保管。先生は「柳田先生とは合い入れないが、この広いスペースを使えることに感謝しないといけない」とよくいわれていました。

昼食もこの研究室で一緒、私がカレーライスと（1つでは足りず）カツ丼などを食べていると「ホーツ、ごちそうですな、自分はこんなものを」と、くやしそうに糖尿食を食べられる姿が今でも眼に浮かぶのです。50年も経つてすでに先生の年も越え改めて思い返すと、あの時カツ丼の半分でも先生にお分けして食べていただくべきだった、と思うこの頃です。